

第6回 10月20日(土) 15:00~

ヴァイオリン コンサート

ヴァイオリン：大津 純子、ピアノ：岡田 知子

<わが祖国>~チェコ国民音楽の巨匠たち

今回はチェコの国民音楽創造に情熱を傾けた、スメタナ(1824~84)と、ヤナーチェクの作品を中心に取り上げます。

ボヘミア出身の作曲家であり、ピアニスト、そして指揮者としても活躍したスメタナはチェコ“国民楽派の祖”として、また、国民的英雄として現在でも国民より絶大な尊敬を集めています。6歳でリサイタルを開き、8歳の時に最初の作品を作曲。また、19歳でリストと親交を結びました。1848年、台頭してきたナショナリストの戦いに自らも加わりますが失敗に終わり、その後、音楽学校設立を試みます。チェコで再燃したナショナリズムに呼応するように、1863年、愛国心に満ちたオペラ『ボヘミアにおけるブランデンブルク家の人々』(18世紀、ボヘミアに侵入したドイツ人を相手に戦ったチェコ人を扱った)を作曲。プラハ国民劇場の創設に関わる傍ら、チェコ国民歌劇の創作に取り組み、オペラ『売られた花嫁』を1866年に作曲。同年、国民仮劇場の指揮者に任命されますが、耳の疾患で完全に聴力を失ったため、1874年に辞任。その後は作曲に専念し、連作交響詩『わが祖国』、ホ短調弦楽四重奏曲『わが人生より』(最終楽章に耳の病からくる「耳鳴り」の音を楽想に取り入れている)、そして1880年のヴァイオリンとピアノのための二重奏曲『わが故郷より』など一連の傑作を残しました。オーストリア支配下にあったチェコ文化の中で育ったスメタナの作品にはドイツ音楽の影響が見られますが、スメタナによって拓かれたチェコ国民音楽創作の動きは、ヤナーチェク(1854~1928)を始めとする後進に受け継がれていきます。

出身地・モラヴィアの国民主義を代表する作曲家・ヤナーチェクは、ブルノやプラハのオルガン学校などで学んだ後、成功を夢見てライプツィヒとウィーンに向かいますが夢果たせずにブルノに戻り、音楽院にて教鞭をとります。モラヴィアの民俗音楽に深く関わり、民謡の編集や和声付け、演奏に取り組みます。1881年にブルノ・オルガン学校を創設し、学長に就任。1904年、彼の第3作目のオペラ『イエヌーフア』(彼女の養女)をブルノにて発表し成功。更に1918年にはそのドイツ語版がウィーンとケルンにて大成功を収めました。丁度その年にチェコスロバキア共和国の設立を見たことがヤナーチェクの創作意欲に拍車を掛け、人生最後の10年間には独自性、精気、活力に満ち溢れた作品を次々に発表します。ロシアの国民主義音楽、特にM. ムソルグスキーのリアリズム芸術に深く傾倒し、モラヴィア民謡と、朗唱=スピーチから醸し出される強いリズムを基礎にした歌劇の創作、また晩年には一連の器楽曲で注目を浴びました。

~ プログラム ~

B. スメタナ：わが故郷より ~ ヴァイオリンとピアノのための2つの二重奏曲

L. ヤナーチェク：ヴァイオリン・ソナタ(4楽章)

ほか

(曲目は変更になる可能性があります)

大津 純子 ヴァイオリニスト

東京芸術大学、米国ジュリアード音楽院卒業後、NY を拠点に演奏活動開始。

ジュネス・ミュージカル・インターナショナル 及び、カーネギー・ホール両者による招待にてニューヨーク・デビュー。セントルイス交響楽団、シモン・ポリバル・ヴェネズエラ国立オーケストラ他との協演、リサイタル・プログラム：〈The Artistry of Junko Ohtsu〉の パブリックTV ネットワークによる全米30都市以上への放映、また、米国でのラジオ放送出演も数多い。ロックフェラー三世財団より2年間に亘り特別グラント受賞。

国際交流基金派遣にて、ロシア、チェコ、オーストラリアなど、欧州、アジア、中南米諸国にて公演し、絶賛される。『ヴァイオリンの詩』、『アメリカ』（1998年、“レコード芸術”誌「室内楽準推薦盤」に選出）、『Prelude to a Kiss』などCD5枚をリリース。近年は、執筆・講演などの分野にも活動の範囲を広げている。

2002年、自ら企画・プロデュースする『Good Old Days』室内楽シリーズ：アメリカの〈素敵な時代〉を立ち上げ、日本のクラシック音楽シーンの盲点であった“知られざるアメリカ”にスポットを当てた意欲的な好企画として、大きな注目を集める。2004年、イラストレーター・和田誠、ジャズピアニスト・佐藤允彦と共に、ジャンルを超えて音楽を楽しもうーという意図のもと、〈Junko and the Night and the Music〉シリーズを開始。3人の異なるバックグラウンドを生かしたユニークな企画は大好評を得ている。また、〈大津純子・心のコンサート〉、〈大津純子の音楽彩々〉など、シリーズ展開中。

岡田 知子 ピアニスト

東京芸術大学器楽科を卒業後、北西ドイツ音楽アカデミー・デトモルトへ留学。声楽の伴奏、器楽とのアンサンブルを学ぶ。K・シルデ、G・バイセンボルンに師事。1976年同校を首席で卒業。1977年1月ベルリン、メンデルスゾーン・コンクール、ピアノ・トリオ部門第一位受賞。同年10月ジュネーブ国際音楽コンクール、ピアノ・トリオ部門第二位（一位空席）及びスイス特別賞受賞。1978年帰国、以降アンサンブルピアニストとして活発なコンサート活動を続けている。

また来日演奏家との共演、CD録音、コンサートのプロデュース等々、多方面で活躍している。毎夏、草津夏期国際音楽祭、そしてスイスで開かれるチューリヒ・マスター・コースに専属ピアニストとして招かれている。